

新メンバー配属

田中研新聞

第二号

二〇一三年十月一日発行

二〇一三年十月一日号
甲南大学知能情報学部田中雅博研究室
毎月発行
<http://carnation.is.konan-u.ac.jp>

懇親会を開催

創刊号でも紹介されたが、この度田中研には8名の新ゼミ生が配属されることとなった。現在田中研には4回生が8名、M1が3名の在籍している。今回の新配属で所属院生、学生との総数が19名となり、研究

室としても久しぶりの大所帯となった。しかし、夏休みの段階ではまだお互いのことをよく知らない現ゼミ生と新ゼミ生。そこで後期から始まるゼミを前に、お互いの顔合わせを兼ねた懇親会を開催するに至った。



後期開始直前と言う忙しい時期にもかかわらず、田中教授や昨年度卒業したOBも1名駆けつけ合計15名で、甲南大学生協2階の食堂を会場としての開催となった。始まったばかりは全員なかなか会話をできず軽く食事を進めるだけであったが、新ゼミ生の自己紹介を皮切りに少しずつ会話が始まっていった。現ゼミ生と新ゼミ生だけでなく、今まで交流がなかった新ゼミ生の間でも会話が始まり、会場には緩やかな空気が生まれつつあった。



食堂にて振舞われた多くの食事に全員が満足し、そろそろ終わりの時間というところで参加者全員で集合写真を撮った。初めの緊張した空気も消え、写真にはこれからの期待に満ちた顔ぶれが並んでいた。(郭哲史)

日本ロボット学会学術講演会

大畔君が好発表

九月四日〜六日、日本ロボット学会学術講演会が八王子で開催され、当研究室から六日、大畔・田中「レーザー距離センサによる反射が不確定な環境下での移動ロボットの自己位置推定」を発表した。登壇したのは大畔君で、自己位置推定というセッションの最初の発表だった。前日は落雷のために京王線が大幅に乱れ、学会開催場所首都大学東京南大沢キャンパスも京王線沿線のため三〇分遅れての開始となったりしたので、大いに翌朝の天気を心配したが、当日は天気も回復し、会場に行ってみると、こ

の研究で土台にさせてもらった論文の著者である、電通大の富沢先生が司会であることがわかり、非常に有意義な発表となった。質問も五つほどあり、こんなに活発に自身の議論ができた発表は、田中教授もあまり経験がないとのことだった。深夜、富沢先生から、大畔君と終了後議論したかったというメールが田中教授に送られてきており、セッション終了後の機会を逃したことを後悔するともに、今回の発表は有益であり、今後につながるものであったと確信できるものであったと思う。

学会発表を終えて

院生ともなれば学会に出て発表しなければならぬ。進学を考えたときから言われ続けたことだが、とうとう私にその機会が訪れた。卒研発表は研究室内外の仲間、見知った教授陣に見守られながら、慣れ親しんだ教室で行った。大勢の前での発表なので当然緊張はあったが、心強くも感じた。それに対して今回は殆どが知らない人である。部屋はそれほど広くないので人数も少ないが、席がかなり埋まっていたため、壇上ではプレッシャーが感じられた。座長が私の研究のベースの論文の著者である電通大の富沢先生だったことも、その理由のひとつだ



ろ。発表そのものは思ったよりスムーズに進んだ。事前の練習のほかに、前夜や当日の朝に見直した方がいいがあったものだ。その後の質疑でも研究の弱みをいくらか突かれたが、慌てふためくこともなく受け答えすることができた。また、短い時間ではあるが、富沢先生と議論をすることができたことは、とても幸運であり、有意義であった。私が発表したセッションでは近い研究をしている人が発表している。その中でも約半数が学生であり、彼らは様々な手法を凝らした成果を発表した。彼らから受けた刺激により、他大学の学生に負けないように精進しようと思う。 (大畔裕)

青春18きっぷで旅行

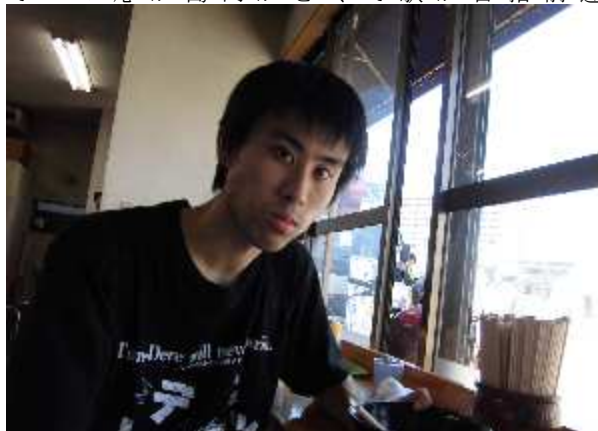
安さだけが魅力？

長期休暇のみ使用できる青春18きっぷというものがある。これを使用すると、JRの在来線ならどこまででも乗り放題なのだ。以前から興味があったため、我々は八月二十一日に岡山と香川へ旅行するために使用してみた。

当日は朝の九時にJR三ノ宮駅に集合し、はじめの目的地である倉敷に向かった。姫路駅で三十分ほど乗り換え待ちの時間があつたが、その後の相生駅と岡山駅での乗り換えはスムーズに行うことができ、三時間ほどで到着した。三時間という時間を聞くと、ネガティブなイメージを抱く人が多いと思うが、移り変わる景観を見ていると案外退屈しないものである。都会から始まり、海沿いや田んぼ

は二日間で八時間程度乗車していたことになる。青春18きっぷの魅力はなんといっても圧倒的な安さであるが、欠点として移動時間が長いことが挙げられる。しかし、時間を贅沢に使って見知らぬ土地の風景を楽しめると考えれば、案外悪くないものだ。(野々口誠人&大畔裕)

の横を走っていたと思つたら、いつの間にか周りが山だらけになっていたりして、とてもおもしろい。翌日は瀬戸大橋を渡って高松まで行った。乗った電車は快速マリノライナーという特急と勘違いしそうな名前だが、一部の指定席を除けば自由に乗ることができる。岡山駅から高松駅まで約一時間。よく晴れていたこともあり、車窓から見える瀬戸内の海は輝き、島々の緑は鮮やかで、とても見応えのあるものだった。



今回の旅行で

お勧め本

小林雅一「クラウドからAIへ アップル、グーグル、フェイスブックの次なる主戦場」、朝日新書

クラウドは、手元のモバイル機器からデータをホストに送り、重い処理をこなしてまたモバイルに結果を送ってみせるという処理方式において、インターネットによりどこからでもホストにアクセスできるというユビキタス性を利用した形態であることは、クラウドを様々な形で使っている皆

さんはご存じだろう。一方、AI(人工知能)は私から見るといささかかび臭い言葉である。あまり期待せずに見始めたら、自分がキヤッチアップできていないことがわかった。AIは、昔ながらの決定木を使ったものではなく、ベイジアンネットワークの時代を経て、ディープラーニングが今ホットであることを知った。ディープラーニングは、階層の深いニューラルネットワークであって、私が学んだ順番はニューラルネットワーク、ベイジアンネット

ト、決定木なので、昔に戻ることを奨励されているようなものである。ディープラーニングを含むAIを使った新しい技術が、現在の技術革新の中核をなしていることがわかった。

第三章「知性の値打ち」AIが生み出す巨大なビジネス・チャンスが私にとつては最も値打ちがあつた。AIを搭載したServer、自動車や移動ロボットに搭載されるSLAM、介護・介助におけるロボットの違いなくロボットの時代であることを、この本を読ん

企業訪問記

求められるコミュニケーション

会社名を出してもよいかどうかちよつとわからないので伏せておくが、このほど大学教員の企業現場研修というのがあつて、手を挙げて参加させてもらった。この会社はシステムインテグレーター企業で、事業領域のお話、職場の見学、事例紹介、そして、入社二、三年の若い社員のお話と質疑応答があつた。

システムインテグレーションとは、大学で言えば教務システムとか、図書館システムとか、その手で

は、専門性の高いシステム開発などの仕事があるという。逆に言うと、プログラミングがそれほど好きでもない。下手でもなくとも、一生それで苦しめられることはないというところだ。

私の担当している、キャリアデザインIIの中である企業の方が言っておられたことと同様であるが、今回訪問したこの会社でも、コミュニケーション力が強く

だ。システム開発をするとき、顧客が必要なことを整理して全部言ってくれてそこから話が始まるわけではない。混沌として、わけのわからないような話から、ほしいものがどういふものなのか、聞き出さなければならぬ。これをする能力をコミュニケーション力という。SEには、営業以上にこの力が必要だということだ。

そして採用において、重視することは、基礎学力、論理力・思考力、ルール・倫理、コミュニケーション力、積極性、人間的な魅力、向学心の七つが挙げられた。基礎学力では、成績も

重視するという。面接で「入社したら死ぬ気でがんばる」という人もいるが、「では、なぜ学生時代にがんばらなかつたのか」を問いますという。私もいつも力説しているように、これからやるという夢ばかり語ってもだめ。必ず実績を問われる。

風評に振り回されてうるうるせず、しっかり学校に来て、自分がすべき勉強をする、これが就活の成功への道だ。勉強以外に誇れるものを持つている人はそれもいい。どんなことでもいいから語れる実績を作ることである。(田中雅博)

田中研メンバー紹介

今月から研究室のメンバーを紹介していきます。まずは修士一年の三人の紹介です。来月号では学部四年の紹介をします。

大畔裕

私は学部時代から自律移動ロボットの自己位置推定について研究しています。以前から機械やロボットが自分で考えて行動するハイテクな世の中を作りたいという夢があり、これを実現するために、私の研究を役立たせたいと思つていま

センサーには音声、光、超音波など、種類の物が存在します。私は物体までの距離を測ることができるよう撮れるカメラを併用し、新しい物体検知の方法を開発することを研究テーマにしています。

最近平均体重をオーバーしてきていて自分でかなと自分で自分を考察してみるところ、趣味であるサイクリ

郭哲史

現在、研究はキネクトを使ってラジオ体操の動作評価をし、採点するシステムを製作しています。卒業ではあつちむいてホイのシステム構築をするなど庶民的なゲームの設計をテーマにしてみました。これらのシステムをいざればオープンキャンパスなどの子供が集まる機会に使うことができると考えています。

また、学部時代では部活動で登山やサイクリングをし、北アルプスや屋久島の宮之浦岳などに行きました。

野々口誠人

今回からは学生が主導して作成しています。前回より写真を増やしたり見出しを大きくし、また夏休み明けの記事が多かつたこともあり、今回は両面構成になりました。

次回からは、まだ書いていないメンバーの記事を掲載し、田中研にはどんな人がいるのか、どんな活動や研究をしているのか、といったことをさらに知ってもらえたらと思つています。まだまだ試作段階ゆえ、デザイン等が予告なく変わることがありますが、ご了承ください。(大畔裕)

編集後記

